

Title	Call授業でのプレゼン
Author(s)	山下, 仁
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2009, 10, p. 39-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70284
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Call 授業でのプレゼン

山下 仁 (大阪大学 言語文化研究科)

1. はじめに

2009年度のCall授業は医・歯・薬の2年生を対象に開講されている。この授業の特徴は、班別になって自由なテーマについてドイツ語で作文し、パワーポイントでプレゼンを行う点にある。また、それを筆者のホームページに公開することで、実際にドイツ人に読んでもらうことを目標にしている。受講生は、すでに文法の基礎を習得しているため、毎回の授業では、文法の復習、作文の基礎、そして作文の応用という3つのことを行っている。文法の復習では、ドイツ語技能検定試験の4級と3級の問題を宿題としてだし、授業中に答え合わせをする。難しい問題には解説を加え、定着を図るためTAにWebOCM上で作成してもらった小テストを実施している。作文の基礎というのは、筆者が作ったドイツ語作文の問題を学生に配布し、授業中に問題を解いてもらい、答え合わせをしながらドイツ語文法の説明をするというものである。配布資料にあわせて作ったパワーポイントを用意し、センター画面に映して説明する。作文の応用は、自由なテーマに関する独作文を基盤とした一学期間に二度行うプレゼンのことである。あらかじめ班を決め、何について発表するかを班ごとに話し合ってもらい、テーマが決まったら各自それぞれの分担についてドイツ語で作文して、最後にそれらをひとつにまとめて発表する。まとめる時には、サイバーメディアセンターが提供する共有ファイルを利用している。授業中は、コンピュータを用いてできることはなんでも活用してよい。ある程度ドイツ語が書けたらワードの機能のスペリングチェックをしてもよいし、インターネット上の和独辞書を用いて単語を調べても、フリーの翻訳ソフトを使って簡単な日本語をドイツ語にしてみてもよい。実際、作文をする際、学生はさまざまなツールを使っている。やや大げさにいえば、ドイツ語の勉強をしながらメディアリテラシーの向上も図

る、ということだが、使えるものは何でも使おう、ということにすぎない。この授業は、もともと作文の授業の延長線上にあったのだが、コンピュータを使うことで、読み書きだけではなく、飽きずに、ドイツ語に触れてもらうことができているように思う。

2. 最初の授業

第一回目の授業は大切に、そこで班を作ったり、ドイツ語の入力方法を学んだりする。通常のキーボードの配列のままでは、ドイツ語のウムラウトやエスツェットが入力できないため、言語バーのJPをドイツ語標準にし、DEが出るようにする。そうすると、ウムラウトなどが直接打てるだけでなく、通常のキーボードのyとzが逆になったり、クエスチョンマークがどこかわからなくなったりして、小さなカルチャーショックが味わえる。次に、ワードを立ち上げてもらい、それを使えるようにする。最近では、学生はほとんど誰でもワードが使えるため、ワードそのものの説明はせず、いきなりドイツ語で何か書くよう指示する。わざと間違ったドイツ語を入力させ、ツールのなかの文字校正という機能を用いて、それをチェックさせる。そのようにして、機械がどの程度まで、どんな間違いを訂正してくれるのかを体験してもらおう。それらができるようになったら、学生各自のマイドキュメントにMein Deutschという名のフォルダを作り、その日に学習したことを保存してもらおう。最近では、最初から自分のログイン名を持っている学生がほとんどなので、ほぼ全員がすぐにMein Deutschを作ることができる。ちなみに、Mein Deutschというのは「私のドイツ語」という意味で、学生自身がそこに自分なりのドイツ語の作文や勉強したことを保存しておく場所、というフォルダである。

2回目以降は、ビデオを用いてドイツで撮ってきた映像を流したり、WebOCMに登録して小テスト

をしてみたり、これまでの学生が作ったパフォーマンスを見せたりするが、通常は教材を配布し、パワーポイントを用いながら作文の基礎の練習をする。

3. 作文の練習

ドイツ語の作文というと、まず文法の説明があり、それに即した何の脈絡もない日本語の文がいくつかあって、それを「正しい」ドイツ語にするもの、と考えられているかもしれない。しかし、この授業で目指しているのは学生に自由に作文をさせることであり、それは、15年ほど前から行っているドイツ語作文の授業の一貫したコンセプトなのである。というのも、意味のない、極めて不自然な日本語をドイツ語に作文することがナンセンスと思えるからだ。「お前たち、静かにしておくれ、父さんが眠っています」なんていう作文の問題があるが、こんなことを日本の学生がドイツ語で言う場面があるはずがない。もちろん、文法としては、「君たち (ihr)」に対する命令の習得、ということであることはわかるのだが、このような作文が出てくるのは英語教育、とくに受験英語の延長としてドイツ語教育をとらえているからに違いない。しかし、大学生であるからこそ、たとえ初修のドイツ語であっても、自分で言いたいことを発信するということが大切と思う。そのためには、教師の側では「教える」から「学ぶ」へ、学生の側では、「sollen (べきである)」から「wollen (したい)」へと意識を変える必要があると思う。が、それについては、いつか別の場で詳しく述べることにしよう。作文の練習としてどんなことを取り扱っているかということ、それは語順の説明であったり、副文の作り方といったもっとも基礎的な事柄である。たとえば、語順の説明では、「私は毎朝妹と駅まで歩きます」という日本語の英訳をさせる。すると、「I walk to the station with my sister every morning.」という英語ができる。次に、ドイツ語の語順は、英語とはまったく異なり、むしろ日本語と似ていて、主文にするときに動詞だけ2番目にもってくる、ということを説明する。

毎朝、	→	jeden Morgen
妹と	→	mit meiner Schwester
駅まで	→	zum Bahnhof
歩く	→	gehen

上のような動詞句を見せ、日本語との語順の対応を示す。これに主語の Ich をつけて動詞を人称変化させれば、Ich gehe jeden Morgen mit meiner Schwester zum Bahnhof. という文章ができあがる、と説明する。そして、この文と先ほどの英語の文とを比較し、ドイツ語では動詞と結びつきの強い語が最後の方にくる、ということを確認し、理解してもらおう。このようなことをパワーポイントで説明する。基本的に、完璧なドイツ語は目指さず、わかればよいという程度のドイツ語を目標にしておき、学生からの個別的な質問に応えるようにしている。その際、1人では応えきれないので、TAにも手伝ってもらっている。

4. あとがき

プレゼンの評価は、そのプレゼンをした班以外の学生が行う。もちろん、教師とTAも評価をするが、まずは学生によって、10点満点でできるだけ差をつけて他の班のパフォーマンスを評価させる。すると、面白いように評価が分かれ、ある程度、優劣がつく。その優劣の差は、ドイツ語が素晴らしいとか、書いてある内容が素晴らしい、というのではなく、おもにパフォーマンスの仕方にあることが多い。人を惹きつけるものかどうか、新しい内容があるかどうか問題になる。それもコミュニケーション・デザイン能力であり、ドイツ語以前にきちんと知っていてほしい事柄なのである。だから、ドイツ語が多少間違っても気にしない。学生の評価が終わり、集計した後で結果についてコメントをするのだが、そのとき、教室は一瞬静まる。学生のほとんどすべてがこちらの一言に集中する瞬間だ。「ほとんどすべての人が、〇班が一番良いという評価を下しました。みんなが同じ評価を下すってすごいことだよ。なんでだと思う。〇班は、どこがよかったんだろう・・・」などとやっていく。もちろん、力を入れていないと

ころは評価が低い。それでも、それでもまんざらでもない。そして、面白いパフォーマンスはさすがに阪大生、と思わせるところがある。そういう班は、自分たちで、このパフォーマンスづくりを楽しんでいるようにも見受けられる。楽しみながら、と言っても、やはりドイツ語なので、苦勞もある。それでも、それをクリアーすることに、なんらかの充実感を得るのであろう。

2009年前期の授業も、発表も終わり、どれも甲乙つけがたかった。2度目の発表のテーマは、「日本の観光スポット」、「福岡の食べ物」、「日本のスポーツ」、「温泉」、「大阪大学医学部」、そして「夏の風物詩」というもので、ドイツ人にも見てもらいたいとつくづく思った。

関心のある方は、以下のサイトをご覧ください。

<http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~yamasita/index.cgi?page=German+page>